

# 安部公房の生政治／死政治

——「事業」から「R62号の発明」へ——

鳥 羽 耕 史

## 1 〈夜の会〉への「夜」の系譜

本稿は、安部公房の作家的な出発点において、生政治／死政治が大きな意味をもっていたことを論じるものである。安部が東大在学中から〈夜の会〉に参加し、そこを起点として『終りし道の標べに』（真善美社、一九四八年）、『壁』（月曜書房、一九五一年）といった小説の出版につなげていったのは有名なことだが、まず〈夜の会〉の成立経緯について振り返ってみたい。

〈夜の会〉とは、文学と絵画を中心とする戦後日本の芸術運動の起点となった会合で、敗戦時に三〇代だった作家、評論家、芸術家たちと、二〇代の若者たちによって構成されていた。彼らはマルクス主義、キリスト教、実存主義、リアリズムなど、様々な思想・芸術上のトピックについて話し合い、関係を持っていた真善美社や月曜書房といった出版社からは、戦後文学を代表する小説や評論が出版されていた。〈夜の会〉は、花田清輝と岡本太郎の出会いによってはじまったが、それ以前の岡本のパリ体験

が、ここでの議論には重要である。漫画家の岡本一平と小説家の岡本かの子の一人息子である岡本太郎は、ロンドン軍縮会議取材と外遊を兼ねた両親のヨーロッパ行きに同行し、彼らが帰国した後も一人パリに留まった。彼はパリ大学のモースのもとで民族学を学びつつ、パリの芸術家たちと交流を深め、アプストラクシオン・クレアシオン展やサロン・デ・シユール・アンデパンダン展に、「痛ましき腕」などの絵を出品した。さらに彼は、画家のエルンストの紹介でバタイユらの政治結社コントロール・アタックに出席し、バタイユの知遇を得てからは彼の秘密結社アセファルによるマルリーの森の深夜の祭儀まで目撃している。その儀式とは次のようなものだった。新月の夜八時に二、三人づれでパリを発ち、郊外の駅から森に行き、雷に打たれたナラの木を観想する。そして二人の人物が松明を灯して持ち、そのうち一人は小刀を別の手に持ち、マッソン描く〈無頭人〉と同化する【図1】。バタイユは松明の火から硫黄を燃やした後、暗闇の中で呪文のようなテクストを朗唱し、祭壇に供犠を投じる。それはメンバー自身の代り

として羊を屠るか、彼らの重要なものを犠牲にするものだったが、一九三九年の最終回にはバタイユ自身が犠牲を申し出、執刀を引き受ける者がいなかったため未遂に終わったということになっている。<sup>(1)</sup>

岡本はこの体験のイメージを変形し、同年に亡くなった母の遺著『生々流転』（改造社、一九四〇年）の装丁に用いる。このイメージは一九四〇年に帰国して四年半の軍隊生活を経験した後にも保持され、「夜」という絵として一九四七年に発表された【図2】。さらに翌一九四八年二月二日の『読売新聞』には「聖火と短刀」と題する「画と文」を掲載している【図3】。「犯罪は夜行われる。」と始まる文は二連から成る詩であり、二連目はこうなっている。「清らかな処女の左手の短刀はひらめく——／見よ！ 彼女の右手の聖火は無気味に戦く——／彼女こそ運命の女神——」。この詩の上には文字通り左手に短刀、右手に松明を持ち、大きく腕を開いたワンピースの女性の姿が左斜め前から描かれている。これは「夜」の発展型であると同時に、〈無頭人〉との関係を明瞭に示した絵でもある。バタイユのテクストに基づいてマッソンが描いた〈無頭人〉は、左手にナイフ、右手に炎をあげる心臓、腹部に腸のような迷路、股間に骸骨を持っていた。「夜」に骸骨とナイフを描いた太郎は、ここで右手の炎をも描いてみせたのだ。この「画と文」はそれぞれ改変を加えられ、特に絵は大きくデフォルメされた形で同年十一月発行の『画文集 アヴァンギャルド』（月曜書房）に収められた。どちらにしても、これらの聖火と短刀がひらめく夜は、岡本にとって〈無頭人〉集会の新月の夜であっ

ただろう。

戦後の芸術運動の相談をしていた文学者たちは、ちょうど「夜」の製作中に岡本家を訪れ、この絵にちなんで彼らの会合の名前を決めた。酒井健はこの絵について次のように述べている。

具象と抽象に引き裂かれる彼の「対極主義」がここに再スタートするわけだが、その最初の作品「夜」はマリリーの森における深夜の祭儀を題材にしている。ただし彼はあの時の夜の聖性に、〈無頭人〉以上に忠実であろうとした。絵のなかには雷が光る森のなかに短剣を持った女性が身をそらせ挑むような姿勢で立っているのだ。彼女は祭儀をおこなおうとしているのではない。夜を、放っておけば神格化されてしまう夜を、否定しようとしているのである。自身の神秘的な深さと純粹さのために絶えず自己への否定を求めているマリリーの夜の遺言を彼はこうして絵に形象化しようとした。<sup>(2)</sup>

「聖火と短刀」においては広げた左腕に持たれることになる短刀を後手の右手に握り、女性は樹上の骸骨、ならびに全体が血走った眼と歯を持つ大きな顔のようにも見える樹木自体と対峙する。有名な〈夜の会〉の「夜」とは、バタイユのアセファルに源を持つ供儀のイメージに発し、しかしそれを否定する絵画から名付けられたものと見ることができる。



図 3

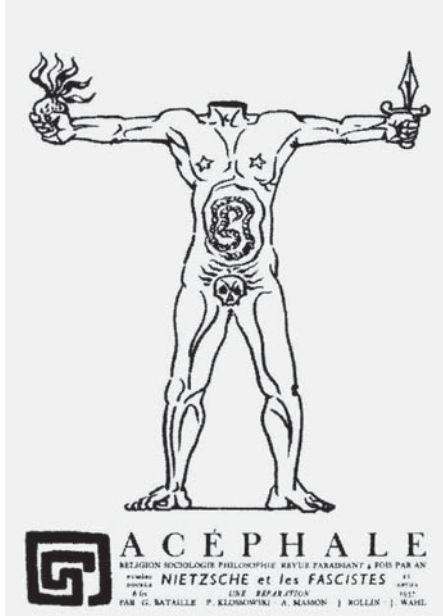


図 1



図 2

## 2 開拓者植民地と安部公房

次に、安部公房の出自の面から検討しよう。平野克弥の論文「日本の北海道創生の中での死政治——開拓者植民地主義と原始蓄積」<sup>〔3〕</sup>は、パトリック・ウルフの区分に従って、植民地主義と開拓者植民地主義を分けて議論している。植民地の人々の労働力の必要性によって特徴づけられる植民地主義と異なり、先住民の必要性によって特徴づけられるのが開拓者植民地主義だというのだ。

そのため、前者での搾取は、後者では除去の論理による交替へと姿を変える。明治政府は北海道を「無主の地」と定義し、ネイティブ・アメリカンを追い出した経験豊富なホレス・キャブロンを雇って「開拓」を進めていった。アイヌは社会進化的に劣った民族と見なされ、開拓者植民地主義の最後の段階である文化的同化、すなわち「文化的集団虐殺」にまで追い込まれる。一九〇三年の大阪万博で台湾原住民、沖縄人、朝鮮人と並んで展示されることで、近代の側からの他者の社会文化的配置の物象化が完了した。アガンベンはナチスの集団虐殺を典型的な例として死政治のテーゼを展開させたが、エメ・セゼールが指摘したように、集団虐殺はナチズムによるヨーロッパのユダヤ人にはじまったわけではなく、それはなく非西欧の人々に適用されていたのである。

この議論は、安部公房の人生や作品と様々な重なりを持つ。安部の祖父父母は全て四国から旭川周辺への入植者で、成功して地主となった人々だった。つまり、地租改正によって貧富の二極に分かれたという農村の勝ち組に属し、新しいブルジョア階級を形成

した側にあった。地主の家で何不自由なく育った安部浅吉と井村ヨリミは、浅吉が満州医科大学在学中に結婚し、東京留学中の一九二四年に公房が生まれたが、翌年一家で満州の奉天（瀋陽）に移った。その後も父の欧州留学中や夏休みなどには旭川で暮らしたので、安部公房は満州と北海道という、二つの開拓者植民地の中で育ったということが出来るだろう。安部にアイヌについての具体的な言及はあまり見られないが、満州における「五族協和」のスローガンと現実のギャップへの違和感があったことはくりかえし語っている。

満洲という所では、私たちは支配階級であつたわけですが、また当時の軍部官僚の圧迫を感じていた私たち一般人という立場からいつても私たちを含めて一切我々を含む人民といふものはありませんでした。中国人が我々の搾取に苦しんでいるのもみましましたし、奉天近辺で八路军と打ち合うのを見たこともありますし、学生を水責めにして拷問するところをみたりして、これらに現実に対する頼りなさを感じていました。

つまり、軍部官僚に圧迫されていた「私たち」を含む支配階級の日本人がいて、その下に開拓者植民地の原住民としての中国人たちが搾取され拷問される様子を居心地悪く眺めていた、ということである。少し先のことになるが、小説「奴隸狩」（『文芸』一九五四年二月号）、「一九五五年三月号」から戯曲「どれい狩り」（『俳優座』一九五五年六月、改訂版俳優座、一九六七年二月）を経て「ウエー

新どれい狩り」(安部公房スタジオ、一九七五年五月)に展開される人間そっくりの動物ウエー、小説「使者」(『別冊文藝春秋』一九五八年一〇月号)やテレビドラマ「人間そっくり」(『SFマガジン』一九六六年九月号一二月号)における人間そっくりの火星人もしくは詐欺師などのイメージには、開拓者植民地において他者化された人々の経験が投影されているかもしれない。肌の色では弁別できない、そっくりなアジア系の支配階級と被支配階級の関係においては、支配階級の言語としての日本語をいかに巧みに操るか、という点が決定的な重要性を持っていたはずだ。それを考える時、「ウエー」としか鳴かない動物ウエーの鳴き声には、韓国語の「(なぜ)や中国語の「喂 wēi(もしもし)」、「唯 wéi(はい)」、「仿(偽) wǎng(にせもの)」などの響きが重なっているように思える。他者化された人々の言語を鳴き声としてしか聞かないことが、開拓者植民地の経験の核であった、ということだ。

### 3 「事業」の生政治／死政治

さて、ここでの生政治／死政治のテーマとの関わりで最初に取り上げてみたいのは、「事業」(一九五〇年)という短編である。これは芥川賞を受けた時の『壁』(月曜書房、一九五一年)という短編集に収録されているが、ほとんど論じられたことも翻訳されたいこともないものである。そもそもは、二十代の作家・芸術家たちで結成した「世紀」というグループで作ったガリ版パンフレットの『世紀群』シリーズの中で、『魔法のチョーク』という短編

に続いて刊行されたものだ。「魔法のチョーク」は描いたものが実体化するチョークを手に入れた貧しい画家が新しい世界創造に挑む寓話的作品だったが、それに続く『事業』はスタイルも内容も全く異なっている。

「偶然の祭壇の司祭」として自ら任じる食肉加工の事業家の「私」は、品種改良して巨大化させた「豚鼠」をソーセージにして、その材料を秘密に販売している。ある日檻を破った豚鼠に妻子と使用人を食い殺された「私」は、それを神の啓示と受けとめ、屍体をソーセージにして試食会を開き大成功をおさめる。「私」は我国のすべての屍体が火葬場に行く前に自分の工場を通るよう認可を得、事業を拡大するが、原料不足が問題となる。そこで「有能なる探偵小説家である貴下」に協力を求めつつ、「私」は生きたままの人間を自動的にソーセージにする機械の私案を作り、「ユートピヤ」と名づける。「ユートピヤ」をねがう人間、すなわち、食用として以外には何んの値打もないような人間共を自発的、自動的におびきよせ、るために入場料を徴収し、入場慾をそそるというのが「私」の案であり、「彼の中の彼」に宛てた手紙の形式で閉じられる。

一見するところ、この小説はスタンリー・エリン「特別料理」のような、人肉食に関わるブラックユーモアのようにも見える。また、食べる階級と食べられる階級とに分かれた社会で起こる、食べられる階級のストライキを描いた「人肉食用反対陳情団と三人の紳士たち」(『新日本文学』一九五六年一月号)という小説で、安部自身が愚直に演じてみせる搾取の戯画化に似ているようでもあ

る。しかし、例えばここに、死政治を論じるスチュアート・マレイが引用したフーコーの言葉「殺されにゆきたまえ、そうすれば、きみに快適な長生きを約束してあげよう」<sup>(6)</sup>を並べてみると、特に「ユートピア」という装置によって、この小説が開拓者植民地と現代とを結ぶような意味を持つことがわかるだろう。「人間は奪われることによっていささかの変化も受けず、むしろ本来的な在り方にとどまるはずだからである」といった人間観は、今日的な生政治の記述としても違和感がない。

最初に「聖プリニウス」の「偶然こそわれらの神である」という言葉を引いてはじめているのはローマ帝国の知恵の継承という意味があるだろう。また、人肉食が許されるという倫理観については、まず動物界や「人食い人種」の共食いの美德について述べた後、次のように考察している。

しかし、なによりも決定的だったのは、生物を殺すのはそれが直接食うことを目的とした場合は罪でないというキリストの教えだった。この教えによってついに、殺人も、それが手段でなく、直接食欲に動機をもっておれば、罪悪にならぬことが認められたのだ。

さらに「偶然の神」の教えとして、「正義は合理精神によってつねに奪う者の側にある」と述べる「私」は、キリスト教の名の下に文字通りの弱肉強食の正当化を行う。そして、「ユートピア」の参考とされるのは、「最近のアメリカにおける豚の屠殺工場」

なのだ。古代の帝国に端を発し、欧米の宗教や機械を参照しながら、鼠肉、事故死の死体、墮胎による胎児、そして殺人とエスカレートしていく「私」の事業は、不要とされる余剰人口の除去という開拓者植民地の現実と、人体の徹底した資源化というナチスドイツの実験との両方を体現したようなものになっている。さらにアメリカ占領下の日本で書かれたというコンテクストを考えると、「大臣などというものは、いずれわれら事業家の使用人にするにしないのだ」という「私」はアメリカ人なのかもしれない。そう考えてみると、以下の一節などはより意味深く見えてくる。

なお、この際ユートピア入場希望者には幾らかの褒賞金を出せという意見がなきにしもあらずなので、あらかじめかかる俗論を封じておく必要があるだろう。一銭たりとも出さぬばかりか、さらに奪わなければならないのである。逆に相当額のユートピア入場料が徴収されなければならないのである。これは単にわれわれのもうけを二重にするという利益があるばかりでなく、かえって心理的に入場希望者の入場慾をそそるといふものだ。

つまりこれは、宗主国の側にいる「われわれ」が、開拓者植民地の原住民を資源化しながら最大限の利益を得る話になってくる。最後の宛先になっている「彼の中の彼」殿とは、彼にとつての彼、つまり「私」自身を指すのだろうが、日本における他者の中の他者、という含意があるものとも読める。「私」内部の妄



想であるような「事業」は、他者化された原住民たる日本人にとつての他者であるアメリカ人が、北海道や満州よりも過酷な開拓者植民地としての収奪を行う話、とも解することができるだろう。

#### 4 「R62号の発明」とアメリカの占領

次に考えたいのは「R62号の発明」(『文学界』一九五三年三月号)という短編である。簡単にあらすじを説明すると、失業して運河で自殺しようとした機械技師が、そこで会った男に自らの「死体」を売って衣食住を保障されるかわりにサイボーグ手術を受け、R62号というロボットになる話である。アメリカ製のパテントを持つ頭脳を入れられて自由意志を持たなくなった彼は、経営不振の製作所、すなわち彼を首にした会社に貸し出され、そこで新しい工作機械の製作にたずさわる。しかしその機械の試運転で社長の高水がスイッチを入れると、機械は高水を抱え込む。R62号は次々に光るランプを押すように指示し、機械は失敗するたびに指を一本ずつ切り落していく。四時間は止められないという機械に絶望した高水が自ら機械にとどめを刺された後、R62号を作った研究所の所長が何を作る機械だったのかを彼に尋ねるが、R62号が答えないうちに機械の電源が切れ、ストライキをした労働者たちが工場に押し寄せてくる、という話である。

一見して明らかのように、これはカフカの「流刑地にて」(一九一九年)を着想の源とした話である。カフカの流刑地においては、ベッドと製図屋とまぐわと呼ばれるパートが組み合わされた

機械に囚人が固定されると、まぐわが彼の体に判決文を書き込み、最後に殺すことになっていた。

安部公房は、本野亭一によって日本で最初に出版されたカフカの翻訳書である『審判』(白水社、一九四〇年)を一九四八年頃に入手し、カフカに傾倒していった。また、一九五〇年には先の(後の会)の若手グループとして活動した(世紀)のガリ版パンフレットとして刊行された『世紀群』シリーズの中で、安部の師である花田清輝が翻訳した『カフカ小品集』が刊行された。『橋』『プロメテイス』『人魚の沈黙』『バケツ乗り』『町の紋章』『寓話について』の六編が収められたこのパンフレットには桂川寛が挿絵を描いたが、彼は当時安部公房と深く交流した画家で、安部の芥川賞受賞作『壁』の挿絵も担当している。『カフカ小品集』の『橋』や『バケツ乗り』には変身のモチーフがあり、『壁』に収められた安部の『S・カルマ氏の犯罪』『パベルの塔の狸』『赤い繭』『洪水』『魔法のチョーク』といった短篇も、何らかの変身が描かれる話になっている。このように、安部は一九五〇年前後からカフカの強い影響を受けたことができる。

しかし、カフカにおいて社会から離れた流刑地における刑罰であった機械は、ここでは社会の中にある工場で使われることになる。その製作意図はR62号君自身によって説明される。

むしろ一番コストの安い人間をどう利用するかということ、そこに問題があるのです。だからぼくは、人間にそのような能力を機械の方から強制し、しかもふんだんに人間をつかう

ような機械、というところに焦点をあて、このような人間合理化の機械を完成したのです……

アメリカ製の頭脳によってこの機械が作られたことをふまえると、これは植民地の人々の労働力を最大限に利用するような機械、と考えることもできる。しかし、結局のところこの機械がしていることは、不規則に点滅するランプを押すことを強制し、失敗したら指を切り落とし、十回以上失敗すると胸を刺して殺す、ということだけだ。最後の沈黙が答えているように、何かを生産する機械ではないのである。だとすると、これは先の開拓者植民地における議論と同じように、不要な先住民を除去する機械、ということになるのかもしれない。経営不振のためにロボットを受け入れるかわりに機械技師を首にした社長の高水は、労働者のコントロールもできず、ストライキと暴動を許してしまっている。「労働者は機械の血液であり、技術者はそのホルモンであり、さらにわれら選民はその心臓と魂である」という所長の演説において、選民の側に入るのだから、雇われ社長の居場所はないのだ。事実、高水が殺されていく過程を選民たる来賓は「異常な興奮」で見守り、銀行の頭取は「無条件に感動」し、所長も「激しい靈感にひたっていた」という。不要な人間の合理的な除去をやつてのける機械は、彼ら「選民」に感動を持って迎えられるのだ。

この選民たちは、これに先立って国際Rクラブの第一回大会を開いていた。彼らはRが意味するものとして、Robot(ロボット)、

Race(人類)、Rule(ならびにReign(支配と権力)、Rich(富)、Revival(よこへはReaction(復古)、Resettle(植民地復活)、Right(正義もしくは右翼)、Rationalization(産業合理化)、Rat(ストライキ破り)、Regular(忠誠なるもの)、Rush(突撃隊員)を挙げる。また、支部として、再軍備のためのRemilitarization Club、情報入手のためのReporter Club、競技場と選挙のナワバリを支配するためのRing Club、実業家のための資源のResource Club、熊手のRake Club、工業家のための未開地開発のReclaim Club、文化人のための宗教のReligion Club、密輸入者や亡命者のためのRun-ner Clubなどが提案される。「代議士、高官、銀行の頭取、大企業、の重役などそれぞれ神によって選ばれた今日の、そして明日の日本の指導階級」としての彼らは、再軍備を行い、植民地を復活させ、戦前に戻ることを目指すようである。しかし、クラブの事業計画として所長が発表するのは、「機械の血液成分たる大多数の人間を、すべてロボット化すること」であり、その手ははじめとして技術ロボットのR62号を作ったというのだ。そのロボット化の技術が完全にアメリカ製で「パテントが二十九もついている」ことを考えると、これは彼らの意図とは反対に、日本の植民地化を進める事業になるはずである。

所長は「無能なる人間どもが、日に日に集団化して労働運動などという動物的退化のふちに沈んでゆく」ことを嘆き、社長の高水は「野郎共がストライキ騒ぎをはじめると、銀行がケチをつける」こと、「ついに怒りを爆発させた労働者たちの、所長の言をかりれば退化現象」について心配する。しかし、機械が作動しは



じめると、「高水の心にあるのはただ、集結した労働者たちが門を破って送電室を占領し、配電盤のスイッチを切ってくれる夢だけ」となる。高水が死んでからその夢をかなえる労働者たちは、「アメリカに売るな」と叫んでいるのだ。つまり、この構図は、アメリカの利益に従って原住民としての労働者を抑圧し、ロボットに置き換えようとする資本側と、それに対抗する労働者たち、という形になっている。一方、R62号はロボットになってから普通の意識や感情を持たなくなるのだが、「窓の下を波うっていく、赤旗とプラカードの行進を見た日」には、「自分が誰であったか想出せないあせりに頭をかかえてもだえた」とされている。アメリカの頭脳によって自由意志を失ったはずのR62号にも、労働者としての自意識がかすかに残っていたのだとすれば、ゴースト・ダステイダー・デバシリタが論じている通り、彼の機械は宗主国のアメリカにRevenge（復讐）をし、Revolution（革命）の契機となるものになったとも言えるだろう。ここでR62号が奇妙な形で社長に復讐を果たし、社長に抑圧されていた労働者たちがそこになだれ込んでくる、という革命のイメージが描かれていることには注意が必要だ。安部公房は一九五一年から一九六一年まで共産党員で、芸術の前衛と政治の前衛の一致を目指していた。無力な主人公を描き続けたカフカとは異なり、ここには徹底的に抑圧された生の例外状態が、逆に革命の契機となる、という彼の政治的ヴィジョンが描かれてもいるのだ。

そもそもR62号は、それ以前の人間としての名前を持たなかった。契約書の草井は「わざと名前は聞かないことにして」最

初から彼を「R62号君」と呼ぶ。自分の「死体」をゆずるしるしのサインの用箋は「ただの白紙」である。

R62号君は、これではたまらぬと思い、なんのサインでしようか？ すると草井はなにくわぬ顔で、分りません、ただそういう規則になっているのです。要するに君が当方に死体をゆずりわたすことを承認したというしるしでしょう。私は単なる一契約係にすぎませんから、詳しい意味は分りかねますが、こんな具合にも考えられますね。法は不知をゆるさずという言葉がある。つまり人間の側から言えば知る権利と義務を意味してる。ところが君はどうですか、これから死ぬというんじゃないですか。それは法の外に出ることだ。つまり自ら不知を要求したわけだ。

そしてサインした「彼」は、「法の外に出る」ことで「さあ、これで君も一人前の死人です」と承認される。生きたまま「一人前の死人」になった彼は「人間」として扱われず、文字通りの白紙委任状によって生殺与奪の権利を研究所に握られてしまったわけだが、この後に起こる事態は、アガンベンが強制収容所について述べていることと重なり合う。

収容所は例外空間であり、そこでは法が全面的に宙吊りにされるだけでなく、事実と法権利が余すところなく混同されてしまう。だからこそ、そこでは本当にすべてが可能なのだ。

まさに例外を安定的に実現することを使命とする収容所特有の法的・政治的構造を理解しなければ、収容所で起こった信じられないことはまったく理解できないままだろう。<sup>9)</sup>

ナチスの強制収容所のユダヤ人が例外状態に置かれつづけたように、R62号は自らの意思を持つ人間からロボットへの改造手術を受けることになる。ここでは、R62号の先輩にあたる58号が机にツノ（アンテナ）をひっかけて死んだ話が語られたり、助手と看護婦をつとめる30号と42号について「いいね、女はロボットにかぎる、ハハ、日本婦人の美徳が完全に發揮されるね」と感想が述べられたりする。特に後者の話において従順さを示すと思われる「日本婦人の美徳」は、手術中のR62号の言動にもつながるものがあるだろう。

彼のロボットへの手術は全身麻酔なしで会話しながら行われるが、頭蓋骨を開けて脳を加工したりする過程で、R62号の感情や感覚は劇的に移り変わり、手術後は「植物のように自足」する存在になってしまふ。これは文字通りに人間の植物への変身と植物園への収容を占領の寓意として描いた改稿版「デンドロカカリヤ」（『飢えた皮膚』書肆ユリイカ、一九五二年）を思わせるものもある。実際、改稿版「デンドロカカリヤ」発表の二ヶ月前、自由党が過半数を占め、共産党の議席がゼロとなった総選挙の結果を受けて書かれた「課題——衆院選挙のあとに」（『現在』三号、一九五二年一〇月）で、安部は次のように述べていた。

本来斗うべき（平和の中で）人間が、生産手段の独占という過程の中で、斗いの場、人間であることをうばわれ、その矛盾が、植民地のリヤクダツ、帝国主義戦争をうんでゆく——今日それがわれわれの周囲では、全国民のドレイ化を通じて行われようとしているのです。ここで、人民の誇りであるレジスタンスの魂を民族の中によびさます仕事、その仕事自身がどんなに大きなレジスタンスであるか、そしてまた、現実を追求することがその本来の課題である文学のいかに大きな課題であるか、それは言うまでもないことでしょう。

国民の除去ではなく奴隷化の危機を訴えているこの主張は、戦後日本の問題を、開拓者植民地としてではなく植民地として捉えていたように見える。木村陽子はこの主張の延長線上に「R62号の発明」を据え、「奴隷物語の集大成」としたが、<sup>10)</sup>これまでの議論からは、ここでの主張と「R62号の発明」との間には断絶があり、さらなる占領認識の深化を示しているようにも捉えられる。つまり、「デンドロカカリヤ」で描かれたのが植民地の住民の現実だったとしたら、<sup>11)</sup>独立翌年に書かれた「R62号の発明」には、開拓者植民地におけるような、むき出しの生の例外状態が刻まれているように見えるのだ。二つの開拓者植民地の出身者として、戦後の東京にきた安部は、まずは食人という身体をめぐる話を通じてアメリカによる占領を、次いで外見的にはアンテナがついただけの姿ながらロボットに改造される話を通じて、独立した日本を描きだした。先にも述べたとおり、「R62号の

発明」の結末は革命や復讐のイメージに見えるが、そもそも安部らの〈夜の会〉の起点に岡本太郎の「夜」があり、そこにはバタイユの供犠のイメージとその否定とが同時に描き込まれていたことを思い出す時、高水という供犠を捧げる儀式の機械を描くことがこの結末の核心にあったと見ることもできるだろう。

こうした地点から、演劇やラジオやテレビでのメディア実験を経て、一九七〇年の日本万国博での自動車館のマルチスクリーン映画のシナリオ制作へと向かっていく安部の政治的姿勢については、さらなる検討が必要だと思われる。最近、日本の各地で流行する芸術祭などの地域アートについて、叛逆精神を欠いた前衛的形式の空疎な反復だとして、藤田直哉が「前衛のゾンビたち」という問題提起を行い、話題となっているが、構造的にはそれに似た問題をはらんでいるようにも見える。未だに英語に訳されていない二つの短編は、ゾンビになる前の機械やロボットがはらむ、今なお続く政治性を示しているのではないだろうか。

- (1) 久米博「社会学者」岡本太郎『岡本太郎著作集6月報』講談社、一九八〇年。
- (2) 酒井健『バタイユ 聖性の探究者』人文書院、二〇〇一年七月、一三〇頁。
- (3) Katsuya Hirano, *Thanatopolitics in the Making of Japan's Hokkaido: Settler Colonialism and Primitive Accumulation, Critical*

*Historical Studies* v2 n2 (2015/09): 191-218

- (4) 安部公房「広場の孤独と共通の広場」『近代文学』一九五二年五月号。
  - (5) Stanley Ellin, "The Speciality of the House", *EQMM* 1948
  - (6) Stuart Murray, *Thanatopolitics: Reading in Agamben a Rejoinder to Biopolitical Life, Communication and Critical/Cultural Studies*, 5, no. 2 (2008): 203-207
  - (7) 中田耕治「世紀」『暦月報』安部公房全集2サブ・ノート』新潮社、一九九七年。
  - (8) ゴーシュ・ダステイダー・デバシリタ「安部公房にとつてのロボット文学：短篇小説「R62号の発明」をめぐる」『文学研究論集』二二号、二〇〇四年三月。
  - (9) ジョルジュ・アガンベン、高桑和巳訳『ホモ・サケル——主権権力と剥き出しの生』以文社、二〇〇三年、二二二―二三三頁。
  - (10) 木村陽子「文学の冷戦と安部公房——「R62号の発明」試論」『国文学研究』一四八集、二〇〇四年三月。
  - (11) 藤田直哉編『地域アート 美学／制度／日本』堀之内出版、二〇一六年。
- 本稿は、二〇一四年三月二十九日のAASでの口頭発表「From Battaille and Kafka to Abe Kobo: via Okamoto Taro and the Night Society」および二〇一六年六月三日のUCLAトランスパシフィックワークショップでの口頭発表「Abe Kobo's Biopolitics/Thanatopolitics: Thinking between Jigyo (A Project) and R62 gou no hatsumei (The Invention of R62)」をふりかへて加筆修正したものである。